

## 博士論文の要旨及び審査結果の要旨

氏名	NABUQI
学位	博士(学術)
学位記番号	新大院博(学)第87号
学位授与の日付	平成30年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
博士論文名	アジア北部民族における掛け合い歌の「綾織り」 —内モンゴルのデーリンチャホラボーと青海省のエレシックを中心に—
論文審査委員	主査 教授 伊野 義博 副査 教授 横坂 康彦 副査 准教授 森下 修次

## 博士論文の要旨

本論文では、内モンゴル族と青海省チベット族の掛け合い歌について、社会的環境、詩、音楽といった要素の多様な関係性の実態を分析、記述、考察することにより、アジア北部民族における掛け合い歌がどのように成立しているかを示し、掛け合い歌の綾織りの様相を明らかにした。なお、ここでいう掛け合い歌とは、二者あるいは二組の者が代わるがわる交互に歌い合う形式を持つ歌のことをいう。また、綾織りとは、一般的な綾織りの用語法を転用し、掛け合いにかかわる様々な要素の複雑な絡み合いのことを意味している。

論文の構成は、「第1章 研究の概要」、「第2章 調査地と調査の概況」、「第3章 デーリンチャホラボーの綾織り」、「第4章 エレシックの綾織り」、「第5章 掛け合い歌の綾織り」となっている。

第1章では、「掛け合い歌」等の用語の定義と研究の対象としての掛け合い歌として、内モンゴルのモンゴル族のデーリンチャホラボー(Derilcha Holboo)と青海省チベット族のエレシック(Eleshik)を紹介するとともに、研究の背景と目的、方法論について述べた。

第2章では、「内モンゴルとモンゴル族の掛け合い歌」及び「青海省と青海省チベット族の掛け合い歌」について、調査地の概況、当地の掛け合い歌の紹介、調査の概況と掛け合いの実際について詳述した。

第3章は、デーリンチャホラボーの社会的、詩的、音楽的な脈絡や構造の実態についてそれぞれ「社会環境、掛け合いの場、社会的機能」「詩的内容、詩的構造、修辞法」「旋律構造、リズム、音階」といった観点から詳細に分析した。

第4章では、エレシックの社会的、詩的、音楽的な脈絡や構造の実態についてそれぞれ前章と同様に「社会環境、掛け合いの場、社会的機能」「詩的内容、詩的構造、修辞法」「旋律

構造、リズム、音階」といった観点から詳細に分析した。

第5章は、二種の歌を比較し、その綾織りの枠組みの共通性とそれぞれの要素の様態の独自性、競争的性格の表現法、修辞法と詩の構造の関係性等について検討した。また、社会環境と社会的機能、掛け合いの場の相互関係性、詩の構造、内容、修辞法の一体性と社会環境の影響、旋律構造と音階やリズムとの絡み合い等について詳述し、掛け合い歌の綾織りの全体的な様相を詳らかにしている。さらに、そうした様相の変動性や現代的な有り様についても言及している。

#### 審査結果の要旨

掛け合い歌は、アジアをはじめ広く世界に存在しており、これまでの先行研究では、主に中国南部から東南アジア、ネパール、ブータン、日本等の特徴的な姿が紹介されている。また、照葉樹林文化における歌垣の視点からの検討もなされてきた。

本論文では、こうした先行研究を踏まえつつ、アジア北部における掛け合い歌について新事例を紹介するとともに、歌をめぐる動的な文化の様態を捉えるための新知見を提案している。

第3章で対象となった内モンゴルのモンゴル族のデーリンチャホラボーは、これまで種々の関連文献の中で単発的に紹介されていた。筆者はこの情報を網羅、整理しつつ、2011年から2014年にかけての現地調査を通して19人のインフォーマントによる掛け合いの実際を再現、録画するとともに、歌詞の収集と翻訳、旋律の五線譜化などによる構造分析、インタビュー等を行い、研究を進めている。そして、このことにより、これまで明らかにされなかった内モンゴルのモンゴル族の掛け合い歌のやりとり、詩や音楽の構造、修辞法及びそれらの関係性を浮かび上がらせている。

さらにデーリンチャホラボーを成立させている様々な要素を分類、整理した。具体的には、まず、戦争、文字、政策、民族の混住と交流、宗教、現代化、インターネットなどの社会環境、政治、宴席、婚礼、寺院、日常、舞台等の掛け合いの場、情報伝達、娯楽、文化交流、知識の学習、伝承などの社会的機能といった諸々の要素を社会的綾織りとしてまとめた。同様に、人と植物、物、様態、場所、文化などの詩の内容、呼びかけ部分と掛け合い部分からなる詩の構造、押韻や風刺等の修辞法といった要素を詩的綾織りとしてまとめた。さらに、旋律構造、音階、リズムなどを分析、音楽的綾織りとして整理している。そして、これらの要素による複雑な絡み合いの状況を指摘、時代や環境により変容するデーリンチャホラボーの綾織りの様相を描き出している。

第4章では、その視線を青海省チベット族に向け、そこで伝承されている掛け合い歌エレシクを対象とした。エレシクの現地調査は、2015年と2016年に10人のインフォーマントによる掛け合いを収録して行われた。第3章と同様の観点からの分析を行い、エレシク特有の様相を浮き彫りにしている。

第5章では、デーリンチャホラボーとエレシクの綾織りの共通点と相違点を述べるとともに、アジアの他地域の掛け合い歌とも比較しつつ、掛け合い歌が社会環境、音楽、詩の複雑な絡み合いから成立しており、時代によってそれらの内的な要素も変化するとともに、多様な要素の絡み合いの状態が変容することを明らかにしている。

このように本論文は、先行研究を検証しつつ、二つの掛け合い歌の実際の分析と文化的脈絡を捉え、比較することによって、当初の目的を達成することに成功している。また、論理構成も整えられている。

本論文の研究成果は、大きく2点にまとめることができる。

第1に、アジア北部民族における掛け合い歌を紹介し、その実際を明らかにするとともに、詳細な分析を行ったことにある。具体的には、内モンゴルのデーリンチャホラボーといった掛け合い歌について、先行研究を整理しつつ、掛け合いの実際を収録、分析し、その実際がいかなるものか示した。さらに、青海省チベット族の掛け合い歌エレシクも同様にその実際を明らかにした。アジア北部地域の掛け合い歌に関する論考は少なく、本論文はこの地域における研究を充実させたばかりでなく、アジア全体の掛け合い歌研究を推進させるものである。

第2に、掛け合い歌の歴史的、社会的な成立、多様な様相や変容の姿について、綾織りといった概念で捉え、社会環境や音楽、詩の複雑な絡み合いや動的な変容の様相を明らかにしたことにある。この捉え方は、若干の脆弱性はあるものの、従来の掛け合い歌研究に新たな視座を与えるものである。

以上のことから、本論文は、博士（学術）の学位を授与するに値するものと判断した。